

ント系アクション映画でよくみられるように、敵を倒した主人公が最後に晴れ晴れとした表情を見せることはない。そして、これと同時に、敵役登場人物も憎い敵役のまま終わるのではなく、主人公と敵の心が通じ合ったと感じさせるシーンが映画に挿入されるように思う。例えば、映画『コーカサスの虜』（セルゲイ・ボドロフ監督 1997 年）は、自分を軟禁していたチェチェン人の村を爆撃するために飛んでいく戦闘機に向かって主人公が「ダメだ。やめてくれ。戻れ！」と叫びながら走り出すシーンで終わる。そして、この『T-34』（2018 年）でも、映画最後で、あえて主人公を道連れにすることを選ばなかった敵将校の姿が描かれていると私は思う。不覚にも、このシーンにぐっと来てしまった。やっぱり、ロシア映画は一味違う。ぜひ映画を見て欲しい。（完）



中央大学のキャンパスで（修了式の後）

ルで健康でいられた秘訣はこれだと確信しました。当時の中央大学などの韓国の大学では学生さんの教室のある建物にはエレベーターがついてないことが多く、愛大生は、朝晩・お昼・休憩の時間ごとに1階から9階をダッシュで駆け上がっていたのです。修了式の後には、学生さんたちは、下宿の管理人の方へあいさつをしました。韓国では今でも賄い付きの下宿に住んで通学する大学生が多いのですが、愛大の男子学生14名も下宿生活にすっかり慣れ、下宿のおばさん「아주머니」（アジュモニ、アジュマ）の朝晩の手料理がおいしかったと言っていたことを覚えています。

#### ソウルの映画館

韓国の中央大学は中心街の江南（カンナム）や明洞（ミョンドン）にわりと近く、学生さんたちは数人でタクシーや地下鉄を使って、買い物などをしていました。私は修了式のあとの休養日に学生さんたちと繁華街に行き、映画を見ました。映画館ではチケットを買う人の列がすごかったのですが、なんとか当日券を買い求め映画館に入りました。私は韓国映画の上映だと思ってチケットを購入したのですが、映画が開始されると、なんとリュックベンソン監督のアメリカ映画『ジャンヌダルク』でした。わたしはチケット売り場に書いてあった「잔다르크」（ジャンヌダルク）というハンゲルが理解できないままチケットを買ってしまったのです。このことで引率の私は中国語の教員で、韓国語は全く当てにならないという噂が学生さんたちの



#### 韓国セミナー

今から21年前の2000年1月～2月にかけて、愛知大学の韓国短期セミナーが提携大学の中央大学で実施され（第3回）、私は引率として参加しました。記録を見ると学生さんたちは1月31日から2月18日までソウルの中央大学で語学研修を受け、語学研修の最終日は、中央大学の修了式や女子寮や下宿へのあいさつ、荷物整理などがあり、1日の休養をはさんで、釜山・慶州への研修旅行に向かいました。修了式の当日、私は学生さんたちと語学研修の9階教室までゼーゼー言いながら階段を上りましたが、学生さんたちが9階までノンストップで駆け上がる姿を見て、愛大の学生さんたちが真冬のソウ



『ジャンヌダルク』の看板(ソウル市プサン劇場)

間で一挙に広がり、研修旅行の時には学生さんはわからない韓国語があると私に聞かずに、バスガイドの人に聞いていました。アメリカ映画『ジャンヌダルク』では神がかったジャンヌダルクがイギリス軍を次から次へと打ち破るシーンと最後に処刑されるシーンが対照的に描かれ、韓国語がはっきりわからなくてもある程度理解できる映画でした。私自身、韓国で見た最初の外国映画は『ジャンヌダルク』となり、日本でロードショー公開される前に、話題のアメリカ映画を韓国で見たという感激をもちました。

#### 韓国での外国映画の開放

韓国では1987年に「六・二九民主化宣言」があり、韓国の映画産業では、アメリカ映画の輸入が拡大していました。また1992年に中韓関係が成立し、中国の民族映画が輸入されるようになるのと、欧米以外のアジア映画が評価されるのを契機に、93年に韓国の民族映画『西便制』（風の丘を越えて、ソピョンジェ）が大ヒットをしました。さらに98年には金大中大統領が日本の国会で「日本の大衆文化の解禁」を表明して、韓国では北野武監督の『HANA-BI』に始まる日本映画の輸入公開が本格化して、日本のポップス、アニメ、テレビドラマなどのジャンルに拡大していきました。韓国では、かつてアメリカ、中国、日本文化の映像・音響製品や書籍類が闇市場で海賊版として販売されていたものが、みな正式な製品として、文



『ジャンヌダルク』の看板(ソウル市明洞)

化市場の店先に出回るようになっていました。2000年の愛知大学の韓国セミナーを実施した時、韓国の映画館では韓国映画に加え、アメリカ映画、中国映画、台湾・香港映画、日本映画が上映されていましたので、学生さんたちはみな驚いていました。特にこの時は日本映画がブームになっていたため、韓国の多くの人々が日本文化や日本人に対して好感をもち、それが2002年のワールドカップ共同開催や日本や中国での韓流ブームにつながりました。

2000年の韓国セミナーでは、愛知大学の学生さんたちが、お世話になった下宿の管理人の方に真っ赤なバラの花束をプレゼントして、その花束を管理人の方は満面の笑顔で受け取られました。私にとっては映画『ジャンヌダルク』でジャンヌが手にしたバラの花として忘れられない思い出となりました。



男子下宿の前で(中央大学の近く)